母の息子から国家の父へ

—*A Romance of the Republic* におけるキングの変貌—

高　瀬　祐　子

0. はじめに

A Romance of the Republic は、奴隷制廃止論者であり、女性・インディアンの権利向上を求めた活動家としても知られているLydia Maria Childの最後の長編小説である。本作品は奴隷開放宣言が出され、南北戦争が終結してから2年後の1867年に出版され、19世紀後半から南北戦争終結までを時代設定としている。描かれているのは裕福な白人として育ったローザとフローラという美しい姉妹の人生であり、物語は姉妹の父が突然亡くなり、2人が混血奴隷であったことが発覚すると大きく動き出す。

これまでこの作品は、ローザが行った赤ん坊の取り替えを中心に論じられてきた。確かに混血児と白人の赤ん坊を取り替えるという行為は、作品の中心となる重要な出来事であり、血と育ちの問題を問う興味深いテーマであるが、本論では「取り替え」のその後に注目したい。取り替えられた二人の子供の成長にともない彼らに大きく関わるようになるのが、まったく血縁関係のないローザの2人目の夫キングである。キングに焦点を当て、彼がこの作品においてどのような役割を果たし、またどのように変貌を遂げたのかを分析し、国家を二分した南北戦争直後のアメリカにおけるキングというキャラクターの意味について考察したい。

1. キングの変化

この作品は2部構成になっており、キングは第1部の冒頭で登場するがすぐに姿を消してしまい、その後第1部にはほとんど登場しない。しかしローザと結婚した後、第2部では彼の役割は一変する。Carolyn Karcher

は彼のこのような変化に触れ、“King comes to dominate the novel”（Karcher, *Slavery* 96）と述べている。奴隷としてフィッツジェラルドに買われたローザがキングと結婚後に、彼の妻として伝統的な上流階級の妻の役割を演じ始めると、物語をキングが「支配する」ようになるのである。またKarcherはキングがこの作品において果たす役割について以下のように言っている。

> In short, King personifies the tragic contradiction between the abolitionist ideal of a classless society in which whites and blacks, men and women, enjoyed equal opportunities, and the racial, sexual, and class paternalism that continued to dominate their thinking and mar their prescriptions for reform.（Karcher, *Slavery* 98）

キングは「アボリッショニストの理想とする黒人も白人も平等な機会を享受する社会と、それに対峙する家父長制の間の悲劇的な矛盾を具現化している」存在なのである。このKarcherの指摘は具体的に何を意味しているのだろうか。キングが実際どのように変化していくのか、その変化の過程を追ってみる。

北部ボストンの裕福な白人であるキングはローザの父ロイヤルの親友の息子として登場する。そしてロイヤルから2人の娘たちを紹介され、姉ローザにひと目で好意を抱く。南部男フィッツジェラルドからローザが黒人の血が混じった混血奴隷であることを聞かされるとキングは激しく動揺し、「母にローザを紹介する」ことを想像して以下のように考える。

> Though he had had a fatiguing day, when he entered his chamber he felt no inclination to sleep. As he slowly paced up and down the room, he thought to himself, “<u>My good mother shares the prejudice. How could I introduce them to *her*?</u>” Then, as if impatient with himself, he murmured, in a vexed tone, “Why should I think of introducing them to my mother? A few hours ago I didn’t know of their existence.”（14、下線高瀬）

キングは「どうやって母にローザを紹介すればいいのか？」と自問し、すぐに「数時間前までは彼女の存在すら知らなかったのに、なぜ母に紹

介することを考えているのだろうか」とつぶやく。ローザと知り合ってすぐに彼女と自分が結婚すると仮定し、その場合どのような問題が生じ、母が奴隷と結婚する自分を認めてくれないだろうとすでに考えているのである。この時点でキングがローザに好意を抱き、結婚したいと思っているのは明らかだが、母に象徴される共同体の息子キングは、混血奴隷ローザへの思いを断ち切ろうとし、母の体調が優れないという手紙が来たのを理由にボストンへ戻る。その際キングはローザに思いを伝えることはせず、その代わり姉妹に「何か力になれることがあれば、兄として力になろう。(“as if I were a brother, should it ever be in my power to serve you.”)」(26) と申し出ている。男としてローザに向き合うことはあきらめ、代わりに「兄」として力になると言い残して立ち去るのである。この時点でキングは母の目を気にする上流階級の家庭の息子に過ぎない。

ボストンに戻ったキングは医者の助言に従い、母を連れて南フランス、エジプトなど温暖な気候を求めて転々とする。しかし、なじみの顔や土地が恋しくなったキングの母はニューイングランドに戻りたいと言うが、二度と故郷を見ることなくフィレンツェで息を引き取る。2年ものあいだ母の看病に身をささげ、彼の心は死にゆく母でいっぱいだったが、母亡きあと1人でアメリカに戻る大西洋の船の上で、キングは再びローザのことを思い出す。ボストンに戻りローザの父ロイヤルが亡くなったことを知ると、キングはすぐにニューオリンズに向かい、ローザたちの情報を求めて歩き回る。ローザたちの隣に住んでいたマダムからローザがフィッツジェラルドと結婚したこと、フローラが行方不明になったことなどを聞くと、キングはマダムに、彼女からなにか連絡があった時はすぐに知らせてほしいと頼み再びボストンに帰る。母の看病をしている頃のキングはローザのことを考える心の余裕すらなかったが、母を亡くしアメリカに戻る頃には再びローザへの思いがよみがえる。しかし、キングがヨーロッパなどを転々としているあいだに彼女はフィッツジェラルドの策略によって、結婚と偽り奴隷として買われてしまっていたのだ。

次にキングが登場するのは第1部の終盤である。この時すでに父親の保護のもと幸せに暮らしていたローザの立場も状況も一変している。父の死後、ローザはすぐにフィッツジェラルドと結婚するが、後に本当は奴

隷として買われただけだったことを知る。フィッツジェラルドとの間に混血の赤ん坊を産み、再び奴隷として売られることを恐れてヨーロッパに逃亡したローザは、ローマでオペラ歌手として舞台に立っていた。再びローザの前にあらわれたキングはローザをフィッツジェラルドから守り、彼女に愛の告白をする。このキングの変化の裏にはやはり母の姿があった。キングは亡き母を思い、次のように語る。

> "What would my dear prudential mother say, to see me leaving my business to agents and clerks, while I devote my life to the service of an opera-singer? — and who has been the victim of a sham marriage! [...] "My dear mother has gone to a sphere of wider vision, whence she can look down upon the merely external distinctions of this deceptive world. Rosabella must be seen as a pure soul, in eyes that see as the angels do; and as the defenceless daughter of my father's friend, it is my duty to protect her." (245-246、下線高瀬)

キングははじめてローザに会ったあとのように、今の自分の状況を母が見た場合のことを想像し、「思慮深い母」が「人生をオペラシンガーにささげている」今の息子を見たらなんと言うだろうかとつぶやく。しかし、キングがローザへの思いを断ち切ろうとした理由でもある母は亡くなり、母と別れたキングはローザへの思いを「彼女を守ることは自分の義務である」とし、ローザに結婚を申し込み、2人は結婚することになる。

キングの父は母より先に亡くなっており、ゆえにキングと母の結び付きはより強固なものであった。キングは気候が温暖で療養に適する地を求めてヨーロッパを転々とし、母が亡くなるまで2年もの間看病に身を捧げた。病弱な母を息子が看病するという母息子関係が母の死をもって破たんするまで、キングのローザへの思いは影をひそめ、母に許されるはずのない混血奴隷との結婚も一旦はあきらめる。しかし母の死後、キングははじめて自らの意志により行動できるようになり、理想の息子像を演じることから開放される。母から独立し自立したキングは、新たな共同体、つまり自分自身の家族という共同体を形成しはじめる。

2. キングと二人の息子

ローザはフィッツジェラルドとの間に自分が産んだ混血の子供が奴隷として売られることを恐れ、正妻リリーベルの赤ん坊と取り替えてしまう。[1]この行為により白人の子供は奴隷として育ち、混血の子供は白人として育つことになる。ローザの実の息子、つまり本当は混血児であるジェラルドはフィッツジェラルドとリリーベルの息子として裕福な家庭に育ち、祖父にあたるベルの莫大な遺産の相続人となっていた。一方リリーベルの実の息子は奴隷として売られ奴隷として生活していたが、ある時逃亡をはかり混血児の妻を持ち北部に住んでいた。

キングは自分とはまったく血のつながりのないこの二人の息子たちに対し、同じ方法を使って親密な関係を築こうとする。ある日キングはローザから自分の赤ん坊とリリーベルの赤ん坊を取り替えたことを告白される。その告白に続きキングは次のようにローザに話をする。

> You have wisely chosen me for your confessor, and if I recommend penance I trust you will think it best to follow my advice. I see how difficult it would be to tell all your own and your mother's story to so young a man as Gerald, and he your own son. I will tell him; and I need not assure you that you will have a loving advocate to plead your cause with him. (265、下線高瀬)

キングは、実の息子であるジェラルドに真実を告げることなどできない、と取り乱すローザに、本当の母親であるローザからではなく「自分がジェラルドに取り替えの事実を伝えよう」と申し出る。

また、リリーベルの息子、ジョージから自分の本当の両親について聞かれると次のように答えている。

> "Your father was Mr.Gerald Fitzgerald, a planter in Georgia. You have a right to his name, and I will so introduce you to my friends, if you wish it. He inherited a handsome fortune, but lost it all by gambling and other forms of dissipation. He had several children by various mothers. You and Gerald with whom you become acquainted were brothers by your father's

> side. You are unmixed white; but you were left in the care of a negro nurse, and one of your father's creditors seized you both, and sold you into slavery. (326)

キングはジョージに、彼の本当の父親であるフィッツジェラルドの育ちや仕事について語るが、ジョージの産みの母であるリリーベルは、奴隷として育ち混血の妻を持つジョージを息子として認めることができず、自分のことはジョージに伏せてほしいとキングに頼む。これによりジョージは母という語り手を失う。血縁関係のある父と母両方の語り手を失ったジョージに対し、記憶のない乳児期の出来事を語ったのがキングである。キング自らが「君の両親と私は無関係である（neither of your parents was related to me in any degree, or connected with me in any way)」(437) と述べているように、ジョージは白人として生まれた自分がなぜ奴隷として売られることになったのか、という出生と育ちの秘密を、血のつながりもなく両親との関係もないキングから知らされるのである。

キングはジェラルドとジョージの幼少期という記憶の空白部分を埋めることにより彼らと信頼関係を築き、さらに疑似的な父子関係を結んでいる。ここで注目すべきは、キングが2人の母親たちの代わりに語り手となっている点である。キングはローザが行った赤ん坊の「取り替え」についてローザに代わってジェラルドに語り、母としての権利を放棄したリリーベルに代わって本当の父親についてジョージに語っているのだ。キングはジェラルドに以下のように語る。

> We are ready to do anything you wish, or to take any position you prescribe for us. You may prefer to pass in society merely as my young friend, but you are my step-son, you know; and should you at any time of your life need my services, <u>you may rely upon me as an affectionate father.</u> (268、下線高瀬)

キングはジェラルドに対し親愛なる父親として頼ってくれと申し出ているだけでなく、同様に、リリーベルの息子ジョージに対しても父として接している。キングは奴隷として育ち、混血児の妻を持つジョージが白人社会で生活していこうとする際に「君が最善を尽くすならば、私の影響力とできる限りの支援をしたいという父としての興味に頼って構わな

い。(If you do your best, you may rely upon my influence and my fatherly interest to help you all I can.)」(436) と言う。キングは取り替えられた子供たちと信頼関係の上に疑似的な父子関係を築き、血縁関係のないジェラルドとジョージを息子としてキングの共同体に迎えいれる。取り替えられた子供たちは南北戦争で同じ北軍として戦うことになり、2人は偶然出会うがジェラルドは戦死し帰らぬ人となる。

本来ならばジョージは孫として祖父ベルの莫大な遺産を相続する権利を持っていた。しかしジェラルドと取り替えられたことにより、その相続権も失ってしまった。そこでキングはジョージに対し、同じ額の財産を自分の資産を使って用意している。キングはジョージがベルからもらうはずであった遺産の額とまったく同じ額を用意し、ベルが亡くなった日から利子が加えられるようにした。さらにベルの娘でありジョージの実母リリーベルに遺された遺産の額を調べ、同額をジョージに遺すと自分の遺書に付け加えたのである。つまりキングは、リリーベルの息子ジョージに対し、彼が取り替えられることなく育っていた場合にもらったであろう金額と同じ金額を用意したのだ。

キングがジョージに行った支援は金銭面だけではない。

> I intend to employ the young man [George] as one of my agents in Europe; and if he shows as much enterprise and perseverance in business as he did in escaping from slavery, <u>he will prove an excellent partner for me</u> when increasing years diminish my own energies. <u>I would gladly adopt him, and have him live with us</u>; but I doubt whether such a great and sudden change of condition would prove salutary, and his having a colored wife would put obstructions in his way entirely beyond our power to remove. (416、下線高瀬)

キングはジョージが南北戦争から帰還したのち、彼に仕事を用意し、いずれは「自分の右腕」さらには養子にしたいと望んでいる。また黒人の妻を持つジョージが白人社会で生きていくのはまだまだ困難であると考え、彼の生活の場としてヨーロッパのマルセイユという新天地を用意した。マルセイユに同行したキングは、その道程でジョージに今後彼が何

を勉強し、努力し、何に気をつけるべきかを講義する。キングは取り替えられた子供たちの母親たちに代わって自らが語り手となり、乳児期の取り替えや出生について語り直す、という父権的行為を行い2人の息子の父となる。

また、白人として生まれ奴隷として育ったジョージに対し、金銭的な援助だけではなく生活面でも細かい指導を行った。奴隷として育ったジョージが、白人と同様に働き暮らせるように教育し、その後養子にする考えがあることを明らかにしているキングは、ジョージの精神的な父となるだけではなく法的にも父となることを望んでいるのである。キングはこうして、血縁関係のない息子たちの父親になることによって家父長的な家族を形成していく。

3. キングとアメリカ国家

フィッツジェラルドによって奴隷として買われたローザとフローラの姉妹は、フローラの失踪後それぞれ別の生活を送っていた。ローザはフィッツジェラルドから他の奴隷主に売られそうになると、ヨーロッパに逃亡しキングと結婚することにより白人社会にパッシングする。フローラはフィッツジェラルドのもとから脱走した後、母代わりとなるデラーノ夫人と共に白人として暮らしはじめ、のちに父の事務所で働いていた青年フロリモンド・ブルメンタールと結婚する。この作品はローザとフローラという美しい混血奴隷の姉妹が白人社会へとパッシングする物語でもある。

ローザは結婚後キングとともに南フランスで暮らしていたが、数年後にボストンに戻る。キング一家がボストンに戻ったことにより、キングは自分の妻と子供という核家族だけではなくローザに関わる様々な人々を含む1つの共同体の中心人物へと変化し、あらゆる物事を取り仕切るようになっていく。

ローザはある日生き別れになっていた妹フローラと再会を果たす。フローラは結婚し、家族と母代わりであるデラーノ夫人とともに暮らしていた。さらにローザとフローラの乳母として長年一緒に暮らしていたチューリーと偶然再会する。奴隷として姉妹に仕えていたチューリーだが、2

人はチューリーの望みを聞き彼女を解放していた。しかしローザがヨーロッパへ逃亡する際にはぐれ、捕らえられた彼女は再び奴隷として働いていたのである。キングはチューリーとその子供を奴隷主から買い戻し、チューリーは再びローザやフローラたちと生活をともにするようになる。さらにローザから取り替えた息子がいると聞かされたことにより、キングはその息子たちも共同体に迎え入れ、キングの共同体はだんだんと大きくなっていく。キングはローザの家族や取り替えた子供たちの捜索、そして救出に尽力する。

ジェラルドの死後ジョージへの相続の手はずを整えたキングは、南北戦争への参加の意思を固め、出征の理由について次のようにローザに話す。

> "Rosa, this Republic must be saved," replied he, with solemn emphasis. "It is the day-star of hope to the toiling masses of the world, and it must not go out in darkness…I foresee that this war is destined, by mere force of circumstances, to rid the Republic of that deadly incubus. Rosa, are you not willing to give me up for the safety of the country, and the freedom of your mother's race?" … "What are all these comforts and splendors compared with the rescue of my country, and the redemption of an oppressed race? What is my life, compared with the life of this republic? Say, dearest, that you will give me willingly to this righteous cause." (423-424、下線高瀬)

「この共和国は救われなければならない」とキングはローザに切り出し、自分の命を賭して戦争へ参加する意思を伝える。この場面では"Republic"という言葉が続けて4回使われ、さらに "rescue" や "save" といった単語も繰り返し使われている。キングは「私の大事なローザを苦しめた汚れたシステム（奴隷制）により、この危険が私たちにふりかかってきている」と言い、奴隷制について妻ローザを通すことにより自らの問題としてとらえている。

同様にフローラの夫ブルメンタールは思いを寄せるフローラが奴隷として売られる時に彼女を救うお金がなかった時の苦悩を思い出し、この呪われたシステムを終わらせなければならないと語る。ローザとフロー

ラは混血奴隷として売られた過去を持っているが、その2人の夫であるキングとブルメンタールは、南北戦争に対し妻を苦しめた奴隷制との戦いであるという共通した思いを抱いているのだ。これまで「家族の救出」に務めていたキングの役割は、南北戦争を前にし「家族の救出」から「国家の救出」へと大きく転換するのである。

この作品が出版された1867年は南北戦争直後である。アメリカがイギリスから独立し、南北戦争を経て再び1つの国家として再建しようとしたように、キングも母と別れ、自らの共同体を形成し、バラバラになった家族の再生に努めている。そして妻を苦しめた奴隷制へのいまいましい思いを出発点とし、南北戦争に参加することにより国家の救出に乗り出す。戦争が終わりキングは右足を失うが、生きて帰還する。次に挙げるのはこの作品の最後の場面である。

> All the family, of all ages and colors, then joined in singing "The Star-spangled Banner"; (星条旗) and when Mr.King had shaken hands with them all, they adjourned to the breakfast-room, where refreshments were plentifully provided. (441)

南北戦争から男たちが帰還し、戦死したジェラルドを除くみなが一同に集まり、一緒に「国家」を歌い、キングがみんなと握手を交わす、という平和的な場面である。ここに世代、人種、性別、言語が入り混じる理想の共同体が描かれている。

では、キングはどのように理想の共同体を作り上げたのだろうか？物語の後半でブライトという1人の人物が登場する。彼はフローラたちが夏に借りていた家の管理人であり、アボリッショニストであると公言している。ブライトは「決して彼らのものではない奴隷を買うために、奴隷商人に多額のお金を払うのは罪であり恥であるといつも主張していた（Mr. Bright always maintained it was a sin and a shame to pay slave-traders so much for what never belonged to them)」(379) 人物である。キングはチューリーや彼女の子供を奴隷主に大金を払って買い戻したが、それに対しブライトは奴隷商人にお金を払うことは罪であり恥ずべき行為であると主張したのである。

ブライトの指摘の通り、キングは奴隷主から奴隷を買うという罪を犯

してまでも、チューリーとその子供を救出する。そして奴隷として育ったジョージに、これから生きていくためにどうすればいいか指南し教育する。世代や人種、言語が入り混じり、平和に歌うこの理想の共同体は、決して理想的な手段で作られたものではない。キングは罪を犯し、恥ずべき行為をし、大金を費やし、奴隷として育った者たちを教育し、理想の共同体を作るのである。

ここで『共和国ロマンス』とも訳されるこの作品のタイトルについてもう一度考えてみたい。タイトルにあるよう作者チャイルドはこの作品を「ロマンス」[2]として書いている。文学史においてロマンスといえば、同時代の作家ナサニエル・ホーソーンが、1851年に発表した長編小説『七破風の屋敷』の序文に記したロマンスとノヴェル論が有名だが、そのホーソーンが『緋文字』の序文として書いた「税関」を “a neutral territory” と位置付けていることから、Richard Chaseはロマンスについて次のように述べている。

> Romance is, as we see, a kind of “border” fiction, whether the field of action is in the neutral territory between civilization and the wilderness, as in the adventure tales of Cooper and Simms, or whether, as in Hawthorne and later romances, the field of action is conceived not so much as a place as a state of mind—the borderland of the human mind where the actual and the imaginary intermingle. Romance does not plant itself, like the novel, solidly in the midst of the actual. Nor when it is memorable, does it escape into the purely imaginary. (Chase 19)

Chaseはロマンスを一種の「ボーダーフィクション」であるとし、現実と想像が混じりあう人間の心の境界地であると述べている。キングの共同体こそ、この境界地ではないだろうか？　現実的な手段で作り上げられた理想の家族は、理想と現実のはざまをさまようロマンスの中でこそ実現可能な共同体なのである。

4. 結論

この作品は様々な角度から読むことが可能である。美しい混血の姉妹が白人男性と結婚し、白人社会で生きていくいわゆる「パッシング小説」でもあり、混血の子供と白人の子供を取り替えるという「チェンジリング」を含んだ血と育ちの問題を問う作品でもある。また、結婚したと思っていた夫に白人の妻がいることが発覚するというセンチメンタルノヴェルの要素も備えている。しかし、キングを中心にこの作品を読むと、母に象徴される家庭の息子として、母の期待に応えるように生きてきた息子が、母の死を機に自らが愛する混血奴隷と結婚し自分自身の家庭を作っていく家庭小説のひとつとして読むことが可能である。

19世紀アメリカの児童文学について論じたGriswoldは著書*Audacious Kids*の中で次のように述べている。

> If American political writing presented the nation as a family writ large, we should not be surprised (given the reciprocity between domestic and political tropes) that America's domestic novels addressed political issues and presented the family as a nation writ small. (Griswold 15)

Griswoldによれば、「アメリカの政治的な著作物が国民を広義の家族と表現しているのだから、(家族と政治の比喩の互換性に従えば) アメリカの家庭小説が政治問題を表わし、家族を狭義の国民と表現しても何の不思議はない」のである。同様にリンカーンのHouse-Divided演説においても国家は家に例えられている。1858年、民主党上院議員スティーブン・ダグラスと共和党から立候補したリンカーンは、おもに奴隷制拡大の問題をめぐって公開討論を行った。リンカーン・ダグラス論争として知られるこの公開討論において、リンカーンは奴隷制に対する姿勢を明らかにするために、有名なHouse Divided演説を行っている。

> A house divided against itself cannot stand. I believe this government cannot endure, permanently, half slave and half free. I do not expect the Union to be dissolved — I do not expect the house to fall — but I do expect it will cease to be divided. (Lincoln)

リンカーンは「分裂した家は立ち続けることができない」と言い、アメリカ国家が奴隷制をめぐり分裂状態におちいっていると指摘し、「家の倒壊は望まない。私が望むのは、家の分裂状態を止めることだ」と訴えた。この演説においてリンカーンはアメリカ国家を「家」に例えている。そして、その家に住む家族はアメリカ国民である。リンカーンは国家レベルの分裂の問題を家族の問題に例え、アメリカ国家そのものが大統領を父とする家父長的な家族制度のもとに成り立っていることを示唆しているのである。

Griswoldが言うように、「アメリカの家庭小説が政治問題を表わし、家族を狭義の国民と表現していた」とすれば、*A Romance of the Republic* において、Childは理想とするアメリカ国家の姿を1つの家庭・家族の物語として描いている。分裂した家族がmultiracial familyとして再生する物語を描くことにより、彼女は国家がmultiracial nationとして再生することを願ったのだ。リンカーンが暗殺された時、Childはその死を悼み、「リンカーンはこのような危機に神が与えた偉大なるギフトである」（qtd. in Karcher, *The First Woman* 486）と述べた。Childは1つの家族の再生に努めた父キングの姿に、道半ばにして銃弾に倒れた国家の父リンカーンの姿を重ねていたのかもしれない。

＊本稿は2011年10月8日に開催された日本アメリカ文学会第50回全国大会（於：関西大学）での発表原稿に加筆修正を加えたものである。

注

[1] 人物相関図

Mr.Bell（Lily Bellの父、Georgeの祖父）　　Alfred Royal（Rosaの父）
↓　　↓
LiLy Bell====Mr.Fitzgerald----------→Rosa====Mr.King
結婚　　結婚を偽装し、奴隷として購入　　結婚
↓　　↓
息子George（白人）　　Gerald（Mr.FitzgeraldとRosaの息子、混血）
↑　取り替えられる　↑

[2] OEDによればRomanceとは、“A fictional narrative in prose of which the scene and incidents are very remote from those of ordinary life” と記されている。

参考文献

Bentley, Nancy. “White Slaves: The Mulatto Hero in Antebellum Fiction.” *American Literature* 65.3 (1993): 502-22.

Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition.* 1957. New York: Johns Hopkins UP, 1986.

Child, Lydia Maria. *A Romance of the Republic.* 1867. Introd. Dana D. Nelson. Lexington: UP of Kentucky, 1997.

Griswold, Jerry. *Audacious Kids: Coming of Age in America's Classic Children's Books.* New York: Oxford UP, 1992.

Hawthorne, Nathaniel. *The House of the Seven Gables*. Ed. William Charvat. Columbus: Ohio State UP, 1965.

———. *The Scarlet Letter.* Ed. William Charvat. Columbus: Ohio State UP, 1962.

Karcher, Carolyn L. *The First Woman in the Republic: A Cultural Biography of Lydia Maria Child.* Durham: Duke UP, 1994.

———. *Slavery and the Literary Imagination.* Baltimore: Johns Hopkins UP, 1989.

Lincoln, Abraham. “House-Divided Speech.” *National Historic Site.* 1 Oct. 2007. NPS.gov. 12 Sep.2012.
http://www.nps.gov/liho/historyculture/housedivided.htm

Murphy, Gretchen. *Hemispheric Imaginings: The Monroe Doctrine and Narratives of U.S.Empire.* Durham: Duke UP, 2005.

Newlyn, Andrea K. “Form and Ideology in Transracial Narratives: *Pudd'n Head Wilson*

and A Romance of the Republic." Narrative 8. 1 (2000): 43-65.

Rosenthal, Debra J. "Floral Counterdiscourse: Miscegenation, Ecofeminism, Hybridity in Lydia Maria Child's *A Romance of the Republic.*" *Women's Studies* 31. (2002): 221-45.

Sundquist, Eric J. *To Wake the Nations: Race in the Making of American Literature.* Cambridge, MA: Harvard UP, 1993.

Tomkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction 1790-1860.* New York: Oxford UP, 1985.

Twain, Mark. *Pudd'nhead Wilson.* 1894. New York: Penguin, 2004.『まぬけのウィルソンとかの異形の双生児』村川武彦訳　東京：彩流社、1994年。

Wills, Garry. *Lincoln at Gettysburg: The Words that Remade America.* New York: Simon & Schuster, 1992.

大串尚代『ハイブリッド・ロマンス―アメリカ文学にみる捕囚と混淆の伝統』東京：松柏社、2002年。

下河辺美知子『歴史とトラウマ―記憶と忘却のメカニズム』東京：作品社、2000年。

巽孝之『ニューアメリカニズム―米文学思想史の物語学』東京：青土社、2005年。

――――『リンカーンの世紀―アメリカ大統領たちの文学思想史』東京：青土社、2002年。

八木敏雄『アメリカン・ゴシックの水脈』東京：研究社、1992年。